

BATTLE GREEN 18

先

月号で、「よい教育」についての親や教育関係者、そしてマスメディアのとらえかたについて語ったが、当の生徒たちはどう感じているのだろうか？

子供たちは学校という場で種々のストレスを覚える。

たとえば、レキシントン町の教育関係者たちは、選択基準そのものが疑問視される高校や大学のランキングに親が踊らされ、わが子を「よい大学」に入れるために学校や子供にプレッシャーを与える風潮を懸念している。

私が会ったレキシントン高校以降LHSと略称の生徒たちも、「そういう親はたくさんいる」と苦笑混じりに認めた。「わが子が Gifted*（註1）か Sped*（註2）のどちらかだと信じて、学校を説得しようとするのが典型的なレキシントンの親」と冗談まじりに批判した生徒もいた。実力が及ばないのに最も難しいクラス（APあるいはオナーズ）にわが子を入れようとして学校に抗議する親や、数学の飛び級をするために夏休みに私立高校の特別クラスに通わせる親は少なくない。いっぽうで、学校がわが子を Spedだと認めないので学校を訴訟する親もいる。

だが、生徒に「あなた自身はプレッシャーを感じている？」とたずねると、ほぼ全員が「私は特に感じていない。それほどがんばっていないから」と答えるのである。「親はうるさく言うけれど、聞き流している」と答えた子もいた。一生懸命やっていると認めるが格好悪いと思っているからかも知れない。けれども、A平均の学生も、CやDがある学生も、学業以外に情熱を覚える芸術やスポーツがあり、学校生活を楽しむゆとりがあるという印象は同様で、日本の高校生のように勉強

だけをしている、という生徒には一人も会わなかった。

学校でのもうひとつの大きなストレスは、「属するプレッシャー」だ。映画『Mean Girls』などで描かれているように、高校ではファッションに気を配り、男子生徒に人気がある「ポピュラーガールズ」と呼ばれる女子生徒のグループが存在し、自分たちの気に入らない子にいやがらせをしたり、無視したりする。頻繁にパーティなどを催し、その招待を武器にすることもある。男子の場合はスポーツができて人気がある生徒が暴力で弱いものいじめをする。日本で問題になっている「いじめ」と類似した問題がここアメリカにも存在する。

ただし、レキシントン公立学校の「いじめ」の現実には少々異なる。まず、小学生から高校卒業生まで幅広い年齢の生徒を取材したが、人種差別を感じた者は皆無で、男子生徒三人をのぞき、全員が「いじめを目撃したことも、体験したこともない」と答えたことである。数少ない被害者の証言からは、いじめつ子のタイプも異なる。腕力があるスポーツ選手というよりも、「金銭的に恵まれ、親から甘やかされ、口達者」な男子生徒がドラッグやアルコールでグループを操り、そこから逃れようとする者には自分の人間関係ネットワークを使って嫌がらせをするのだという。だがもつとも興味深いのは、いじめが起これるのは中学校であり、他の地域や日本でいじめの多い小学校や高校でのいじめを訴えた者がいかなかったという事実である。

なぜこのような違いがあるのだろうか？
まず小学校でのいじめがないことについては、学校の努力を評価する

べきだろう。

レキシントン公立学校では、教師にトレーニングを与え、いじめの芽を最初から摘み取る対策を徹底している。小学校のPTA会長を経て小学校の教師になったシルバーマンは、子供の年齢に応じたいじめやからかいの特性を挙げ、教師がそれを早期に発見し、即座に対応する重要性を語ってくれた。それを聞いて私は娘の小学校の担任教師が、「このグループに入るができるのは、ブロンドの子だけ」といった「排他的グループ」を作るのを禁じていたことを思い出した。たぶん何よりも効果的なのは、教師が「私はいじめを見逃さない」、「いじめつ子の味方はいじめつ子」というきつぱりとした態度を生徒に示すことなのだろう。

中学校でいじめが増えるのは、教師の影響力が弱まると同時に人気者集団に属する欲求が強くなるからなのかもしれない。また、中学校は社

会が狭いために、前述の典型的な「人気者」が支配者階級になることができ、支配者のいじめや無視のターゲットになると逃げ場がほとんどない。だが、LHSの在校生と卒業生によると、中学校での「人気者」たちは高校に入學すると「ただのひと」になってしまい、影響力を失う。LHSには、中学とは異なり、ブランド品にこだわる女子や自分の意見を持たない女子が馬鹿にされ、フットボールなどのスポーツ選手よりも演劇や音楽の才能がある男子が人気者になる校風があるということだ。

このLHSの校風はどこから生まれるのだろうか？

まずLHSでは、フットボールといたったスポーツよりも吹奏楽、オーケストラ、ジャズ、演劇、数学チーム、ディベートチームなどのほうが有名である。ここが周辺の町の高校とは大きく異なる。LHSでもスポーツ好きの生徒にとってはスポーツ選手は魅力的な存在だが、数学チーム、ディベートチーム、ジャズグループ、アカペラグループ、演劇・ミュージカルといった小社会にはそれぞれのスターが存在し、そこではフットボールのスター選手には「それ、誰？」といった反応しかもどつてこない。次に、LHSには圧倒的な人種のマジョリティがなく、学校、保護者、生徒の協働により、生徒のディバーシティを尊重し、ゲイの生徒がおおびらに自分の性的オリエンテーションを公表できる雰囲気確立している。

LHSはSATスコアの平均点が高いことで知られており、昨年度は（入試などの選考過程がある高校を除いて）州で最高位（註3）だった。SATで満点を取った生徒でさ

えテストの点数の高さをLHSの誇りだとは考えていない。生徒たちは、「点数を気にする」アジア系の生徒が多いからあたりまえ、「もともと勉強好きの生徒が集まっているだけのこと。特に教師やプログラムが良いからではない」と、世間のランキング熱を冷めた目で見ている。

生徒たちにとつてのLHSの誇りは、点数ではない。それよりも、「政治や社会的正義について他校よりも敏感である」ことであり、「豊富なプログラムやクラブ、社会活動に応じて多くの小社会が存在することであり、「自分のアイデンティティを隠したり、否定したりしなくてもよい」ことなのである。ある学生が私に言ったように、「そのつもりがあれば、必ず自分を受け入れてくれる場がみつけれられる」学校こそが「良い学校」といえるかもしれない。

註釈* 1) Gifted Children: 天賦の才がある子供。ただし、日本語の「天才」とは異なる。種々の定義があるが一般的にはその年齢のトップ2~5%に属する優れた才能がある子供。才能の分野も多様だが、レキシントン公立学校で対応しているのは数学のみ。学校により対応は異なるが、高校では飛び級や大学の延長クラスの受講を認めるシステムがある。
* 2) Sped: 特別教育 Special Educationの略称。
* 3) SATスコア: Scholastic Assessment Test, 大学進学適性試験。Critical Reading, Mathematics, Writingの三科目があり、それぞれで最高800点、最低200点。レキシントン高校の昨年度の平均点は614/631/618で(マグネットスクールを除く)マサチューセッツの公立高校では最高点。

★プロフィール★
わたなべ ゆかり・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。そのディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年『ノーティーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。
＜著者のブログ＞
<http://watanabeyukari.weblogs.jp/>

バトルグリーン／連載エッセイ18

渡辺 由佳里

生徒の視点